

能登演劇堂訪問を月刊誌「たのし」へ掲載

氏名：西島 幸夫 職業：経営コンサルタント（ISO取得支援） 都道府県：東京都

金沢へ墓参の折、足を伸ばして能登演劇堂(10月下旬)へ行ってきました。

評判通り素晴らしい劇場で、はるばる出かけた甲斐がありました。

もっと早く訪ねるべき処だと思いました。

能登演劇堂・無名塾公演を含め、能登七尾と訪ねたことを会員制情報誌「たのし」へ掲載しました。

情報誌での発信以外に、個人的にも友人に郵送したり、メールしています。

またプリントして名刺に添えて手交して話題提供しています。

掲載された記事はコチラです。



[18-1月号「能登演劇堂」.pdf](#)  



能登演劇堂で無名塾公演を観る

能登七尾を訪ねる旅

いしかわ観光特使 西島 幸夫



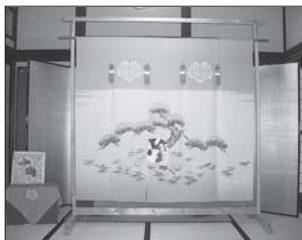
幟が立つ能登演劇堂

に恵まれ日本海沿海交易の拠点となり、京の文化も取り入れ往時は北陸一賑わった。その名残を留める一本杉通りを歩いた。蠟燭屋、醬油屋、昆布屋などの老舗が並ぶ六百年の歴史をもつ商店街だ。一角にある当地の婚礼文化を伝える「花嫁のれん館」を観た。幕末頃から加賀藩(能登・加賀・越中)の風習として始まったらしい。能登七尾に色濃く残っている。花嫁は嫁入りの際、実家の紋を入れた「花嫁のれん」を婚家の仏壇の入り口にかけてくぐるのしきたりがある。覚悟の「れん」をくぐる訳だ。そして、先祖にお参りし結婚式が始まる。

中世から栄えた能登七尾へ

はるばる能登演劇堂を訪ねてプレヒト作「肝っ玉おっ母と子供たち」を観た。演劇堂は能登半島の中程、のと鉄道で七尾から20分の能登中島にある。金沢から特急に乗り約50分で七尾に着いた。駅前広場に立つ戦国時代の絵師長谷川等伯の銅像が迎えてくれる。七尾は等伯の生地だ。青雲の志を抱いて京へ出立する33歳の等伯像である。

七尾は室町時代から守護畠山氏が治める城下町だった。良港



花嫁のれん

結婚式が済んだ後は筆筒の奥にしまわれ、2度と掛けられることは無かった。嫁ぐ娘への親の想いが込められてもあり、加賀友禅の高価なものも多い。近年、その伝統美が評価され再び日の目を見るようになった。

能登から演劇文化の発信を!

七尾から観劇バスで30分。能登演劇堂へ着いた。仲代達矢主演の「肝っ玉おっ母と子供たち」は連日満員で観客は全国から足を運んでいる。ドイツの劇作家プレヒト(1898~1956年)の約80年前の反戦劇は今観ても戦争の虚しさや胸を打たれる。幕が上がるのと舞台奥の閉鎖式大扉が開かれる。後方に秋の風景が広がり、1台の輓車がゆっくりと入ってきて物語は始まる。能登の自然がそのまま舞台にとり入れられているこの劇場ならではの演出に客席から拍手が起きた。作品の背景となる30年戦争は、17世紀ヨーロッパでカトリックとプロテスタントが尖鋭に对立した宗教戦争だ。仲代演

ずる行商人・肝っ玉おっ母ことアンナは3人の子とも輓車を引いて軍隊にあらゆるものを売って戦場を渡り歩く。巧妙に立ち回ることでもわが身も商売も子どもたちも守り切れると信じていたが、苛酷な戦争は3人の子等の命を奪う。商売も上手くないかない肝っ玉おっ母は、死んだ娘の為に子守歌を歌い、独りぼっちで輓車を引いてゆく。悲惨な戦争はまだ終わる気配もない。ユーモアと笑い、歌もある3時間の舞台を、仲代は渾身の演技で演じ切った。



「肝っ玉おっ母と子供たち」舞台奥の野外風景 (写真提供 能登演劇堂)

熱演する仲代達矢 (写真提供 能登演劇堂)



仲代達矢と能登演劇堂の歴史
走り続ける85歳、名優の足跡は平坦ではない。人の10倍も努力してその一つ一つの努力の上に成り立っているという。役者魂を感じさせる迫力で新劇界を牽引してきた。切れ味の良い演技に魅せられ筆者も若い頃からファンだった。演劇の世界に安住することなく映画でも活躍した。パンフレットの中で「現在のような危ない世相を見るにつけて、最後の戦争体験の世代として、言い残しておくことがある」という。戦争の虚しさや悲惨さを伝えたくてプレヒトを取り上げたのだ。

1983年に夫人の隆巴(演出家)と家族旅行で能登を訪れ中島町が気に入り「この恵まれた自然の中で芝居の稽古ができたら」と思った。この思いが当時の中島町町長に受け止められ無名塾の中島合宿が始まった。やがて人口7千人の過疎の町で無名塾を観たいという願いが芽生えた。仲代の協力・監修を経て1995年5月、ついに能登演劇堂は完成した。演劇を地域の文化資源として育み、地域のブランドにしようという「能登から演劇文化の発信を」掲げる。終演後は近隣の和倉温泉に宿をとった。観劇の余韻に浸りながら温泉と食事を楽しむ贅沢な秋の一日が更けていった。

(この項おわり)